

| Title | 『観音冥応集』の性格と研究の課題 |
|--------------|------------------------------------|
| Author(s) | 山崎, 淳 |
| Citation | 語文. 2008, 90, p. 1-10 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/69102 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『観音冥応集』の性格と研究の課題

山崎

淳

はじめに

の性格を浮き彫りにし、あわせて研究上の課題を提示していきたいた。そこで本稿では、いくつかの観点から、改めて『冥応集』が、紙数の関係上、基礎的研究として触れるべき多くの点を割愛が、紙数の関係上、基礎的研究として触れるべき多くの点を割愛食文の通覧が可能となった。稿者は、同書の「解説」を担当した。またの『冥応集』については、平成18年に『宝永版本 観音冥応この『冥応集』については、平成18年に『宝永版本 観音冥応

『冥応集』の成立

『冥応集』巻一には宝永二年(ハル)、巻六には宝永三年の刊記が『冥応集』巻一の三(前集)が宝永二年刊、巻四の六(後集)が宝永三年刊、実際、『冥応集』巻四内題下には「後集一」とある。したがって、十四年[228] 刊)によれば、『冥応集』は前集と後集から成る。 宝永六年版『辯書籍目録大全』や『享保書籍目録』(享保ある。宝永六年版『辯書籍目録大全』や『享保書籍目録』(享保ある。宝永六年版『関応集』巻一には宝永二年(ハル)、巻六には宝永三年の刊記が

まさに蓮体の悲願だったといえる。といこ、『冥応集』の執筆動機を確認してみよう。蓮体は、『冥応集』の計算がまかったいる。常に嘆いているのは、日本は観音が垂迹した国であり、その霊験が非常に多いのにもかかわらず、記録の集成がないことでいる。常に嘆いているのは、日本は観音が垂迹した国であり、を六回、『地蔵経』を七回講義した。地蔵の験記はすでに備わっを六回、『東応集』の執筆動機を確認してみよう。蓮体は、『冥応集』の執筆動機を確認してみよう。蓮体は、『冥応集』の執筆動機を確認してみよう。

録されていることである。『礦石集』成立の時点で、観音説話集話、このうち第25話前半は、『冥応集』巻五第33話に転用)が収は、その『礦石集』巻一第26話において「地蔵・如意輪観音一体は、その『礦石集』巻一第26話において「地蔵・如意輪観音一体は、が記すように、「地蔵ノ験記」である蓮体編の地蔵説話集「叙」が記すように、「地蔵ノ験記」である蓮体編の地蔵説話集

長冬勺こう巻上はったまでつっては、『夏広集』巻で下尾で、 「親」の「巻重リテ六ツ七ツ八葉ノ心蓮ヲ開シメ玉へト、名 巻一「叙」の「巻重リテ六ツ七ツ八葉ノ心蓮ヲ開シメ玉へト、名 巻一「叙」の「巻重リテ六ツ七ツ八葉ノ心蓮ヲ開シメ玉へト、名 巻一「叙」の「巻重リテ六ツ七ツ八葉ノ心蓮ヲ開シメ玉へト、名 巻一「叙」の「巻重リテ六ツ七ツ八葉ノ心蓮ヲ開シメ玉へト、名 がすでに構想されていた可能性も考えられるだろう。

は、『冥応集』の長谷寺特集巻が幻に終わったということでれている。同類の本がこれなのか、即断はできない。確実刊行されている。同類の本がこれなのか、即断はできない。確実長谷寺関係の書としては、『長谷寺霊験記』が承応二年(協)に長谷寺関係の書としては、『長谷寺霊験記』が承応二年(協)に長谷寺関係の書としては、『長谷寺霊験・也。現以」有。梓行に此集、雖」可」有。八巻、末二巻顓長谷寺霊験・也。現以」有。梓行に此集、雖」可」有。八巻、末二巻顓長谷寺霊験・也。現以」有。梓行に此集、雖、可」有。

もっとも、その二巻分を除いても、『冥応集』には百九十二話

ぶ蓮体の許には、それだけの説話が蓄積されていたのである。応集』成立に際し、「普門品ヲ講ズル事六回」(巻一「叙」)に及話中に複数話を含む場合もあり、実際の話数はさらに多い。『冥話中に複数話を含む場合もあり、実際の話数はさらに多い。『冥

二配列

わしい形で構成されている。以下に概観してみよう。その初めの部分、すなわち巻一前半は、観音説話集と呼ぶにふさ(一1)とある通り、『冥応集』は一大観音説話集となっている。「今此冥応集ニハ、…日本古今ノ霊応ヲ集メテ大成セント欲ス」

| | | | | | - | _ | | |
|---|-------|----------------------|------------------------|---|----|------------------------|--------------------|-----------------|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | | 2 | | 1 |
| | | • | • | | | | | |
| [附我朝観音形像始メノ事]―――――――――――――――――――――――――――――――――――― | 内侍所ノ事 | 観音娑婆有縁殊ニ日本ニ有縁ナル事―――― | 観自在菩薩四重秘釈ノ事(奥義について)――― | | | ・ 六観音八大観音ノ事附。 名号ニ多種アル事 | (観音についての参考文献・引用文献) | 観自在菩薩本説ノ事―――――― |
| の関係 | 観音と | | | | 概説 | | | |
| 係 | ع ع | Ĺ | | | | | | |

一8・河内国藤井寺千手観音ノ事――――以降、各地の寺

起・霊験譚院・観音の縁

といえよう。連体は記事の配列に、非常に気を配っていたことが展開していく。一1~8は、極めて整然とした構成になっているをして一8からは、日本各地の観音霊験譚や寺院縁起が具体的に聖徳太子、その時代に作られた日本最初の観音像へと話は及ぶ。聖徳太子、その時代に作られた日本最初の観音像へと話は及ぶ。一1~4は、観音についての概説である。この概説が終わると、一1~4は、観音についての概説である。この概説が終わると、

容を挙げる(関連すると考えられる要素を傍線・四角囲み等で示く収録されている。以下に巻四前半のうち、四1~13の簡単な内応集』巻四前半(巻四本)では、中山寺の観音に関する説話が多次に、巻四を例にして、説話配列を見ていくことにする。『冥

うかがえる。

話)。 話。四6、7は光明真言の利益。四7は嫉妬の21~7→摂州中山寺の十一面観音(四5は中山寺の秀鑁の

四9→嫉妬心がない大内義隆妻・貞子。 嫉妬怨念の鬼の所為。後半は、嫉妬深い妻が登場。四8→前半の舞台は摂州。光明真言の利益。ある娘の病気は、四8→前半の舞台は摂州。光明真言の利益。ある娘の病気は、

事出産(地蔵]の感応)。 住吉への途次、雷雨甚風に遭うが、狐火のおかげで無四10→嫉妬深い北条政子。追放された頼朝の愛人(妊娠中)、

よう男に勧める。 | 秀鑁、寂業を懺悔して、中山寺の観音と|琰摩天|に祈る四11→大蛇を殺した男が怪異に遭う。中山寺の秀鑁に相談。

山寺で観音に奉仕し、深く寂業を慚愧して出家。四13→漁を生業とする男、観音を念じて洪水から助かる。中四12→猫神の祟り。野干の祟り。野干が武士を恐れ逃げる。

蔵説話である四10との連結がより確かなものになると考えられる。 大地蔵と閻魔は同体と見なされている。このことで、四11と地る対象として、観音のみならず閻魔天も挙がっている。周知の如る対象として、観音のみならず閻魔天も挙がっている。周知の如る対象として、観音のみならず閻魔天も挙がっている。周知の如る対象として、観音のみならず閻魔天も挙がっている。周知の如る対象として、観音のみならず閻魔天も挙がっている。周知の如る対象として、観音の連結がより確かなものになると考えられる。のと以降の数話に中山寺は登場せず、四10に至っては、場所が住吉である四1との連結がより確かなものになると考えられる。

としての面目が保たれることになるのである。とが理解されよう。この配列によって、『冥応集』の観音説話集話中の要素の連結により、再び中山寺に帰ってくる配列であるこ

巻四前半は、途中で中山寺から離れていくようでありながら、説

以上のような流れの中、中山寺は四11で再登場する。『冥応集』

である。ともに観音説話であり、並ぶことに問題はないかもしれである。ともに観音説話であり、並ぶことに問題はないかもしれ(四17)、「備中宝泉寺ノ観音ノ縁起、並ニ報恩大師ノ事」(四18)二話の題目は、「光明皇后、玄肪僧正、並ニ観音ノ化身ナル事」巻四の例を、もう一つ挙げておこう。巻四後半(巻四末)冒頭

で取り上げるのが、両話の次の部分である。間にどのような関係があるのか、気になるところではある。そこない。ただ、光明皇后の説話と中国地方の寺院に関する説話との

云者、讒シテ、玄肪、光明皇后ト密通シ玉フト奏スルニ、…・〔朝廷が玄肪に対し〕アマリ尊敬甚シケレバ、藤原ノ広嗣ト

は

師ノ開基ナリ。(四18)・備中国都宇郡矢部村日差山宝泉寺ハ孝謙天皇ノ御宇ニ報恩大

いることがうかがえる。もちろん、説話配列にどのような意識がいることがうかがえる。もちろん、説話配列にどのような意識が重視する別に連体は、様々な素材を駆使し、説話を緊密に配してに認められる。さらに孝謙天皇(称徳天皇)といえば、道鏡―孝謙天皇が四17の後に18を置いたのは、玄肪―光明皇后、道鏡―孝謙天皇が四17の後線部によれば、宝泉寺の開基は孝謙天皇の治世である。四18の傍線部は、玄肪と光明皇后が密通したという讒言である。四17の傍線部は、玄肪と光明皇后が密通したという讒言である。四17の傍線部は、玄肪と光明皇后が密通したという讒言である。四17の傍線部は、玄肪と光明皇后が密通したという讒言である。

働いたかについては、

(ほ) 他の巻も含め、さらに考察の余地があろう。

こころはくめの谷水」(脳番・忍恋を

忠頼)という和歌に極め

今後の課題の一つである。

三 読者を惹きつける工夫

摘した。 適は、「大平記」の美文を利用して増補したものであることを指連体が『太平記』の美文を利用して増補したものであることを指事」(出典は『沙石集』)に見える和歌的表現を基調とする美文は、事」(出典は『沙石集』)に見える和歌的表現を基調とする美文は、稿者は旧稿において、三8「和光ノ方便ニ依テ愛執ヲ離ル、

言ノ功力疫神ヲ禳フ事付タリ五宮ノ御室及ビ地蔵ノ霊験ノ事」になっている。例えば、五9「金剛山実相院舜海僧正ノ修験並ニ真三8に限らず、和歌的な修辞は、『冥応集』の特色の一つと

で重ぶるようりまぎ見り艮)見出せない。 久米の岩橋伝説を踏まえる和歌は珍しくないが、ここまて近い。 久米の岩橋伝説を踏まえる和歌は珍しくないが、ここま

で重なるものは管見の限り見出せない。

推測される。と同時に、読者にとっては、心地よく響いてくるものであったとと同時に、読者にとっては、心地よく響いてくるものであったとこれらの箇所は、蓮体の表現上の嗜好を示しているといえる。

さを持つものが多いが、次に挙げる、二4「泉州槙尾山千手観音『冥応集』の和歌的修辞は、右に挙げたような、ある程度の長

説話は、当時の読者にとって身近なものとなるといえる。

うした時事ネタを折り込み、冗談めかして終わることで、往古の

二4は、複数の話題から構成されている。傍線部は、そのうちに近って「(配番・題しらず 素性法師)に基づいていると指摘することはたやすい。むしろこの例では、和歌の一部を提示して、言わんとするところを想起させる言葉遊びになっていることに注意しんい。話の末尾に置かれた謎めいた言葉によって、読者はいったん立ち止まり、それを解く楽しみを得ることになるといえよう。『古今和歌集』前掲歌の波線部を踏まえれば、意味は「〔千手観音の霊験を寺僧に尋ねたが〕寺僧は何も答えてくれなかった」となの言義を寺僧に尋ねたが〕寺僧は何も答えてくれなかった」となの言義を寺僧に尋ねたが〕寺僧は何も答えてくれなかった」となの言義を寺僧に尋ねたが〕寺僧は何も答えてくれなかった」となる。

の末尾である。 次の例は、二4の「附タリ」、「吉祥天女ノ本説並ニ利益ノ事」

れた宝永頃は、米価が高騰していた時期である。締めくくりにこされている。「彼米嚢」はそれらを踏まえる。『冥応集』が出版さら得た江諸世(出典は『元亨釈書』巻第二十九)や、同種の米嚢ら得た江諸世(出典は『元亨釈書』巻第二十九)や、同種の米嚢ら得た江諸世(出典は『元亨釈書』巻第二十九)や、同種の米嚢ら得た江諸世(出典は『元亨釈書』巻第二十九)や、同種の米嚢ら得た江諸世(出典は『元亨釈書』巻第二十九)や、同種の米嚢

的修辞に数えることができるだろう。

の修辞に数えることができるだろう。

の修辞に数えることができるだろう。

の修辞に数えることができるだろう。

の修辞に数えることができるだろう。

の修辞に数えることができるだろう。

所と捉えることもできるのではないだろうか。いだろう。あるいはこれらは、蓮体の説法の実態が反映された箇以上の諸例に、読者を惹きつけるための蓮体の工夫を認めてよ

四 蓮体の取材源

挙げられている。 『冥応集』一1には、「援引書目」として次の三十三種の作品が

愚癡物語、鎌倉志、泉州志、四国辺路道指南 鬼癡物語、鎌倉志、泉州志、四国辺路道指南 愚癡物語、鎌倉志、泉州志、田田辺路道指南 八里、日本霊異記、古事因縁集、日本往生極楽記、郡率上 類聚国史、日本霊異記、元亨釈書、日本往生極楽記、郡率上 類聚国史、日本霊異記、元亨釈書、日本往生極楽記、都率上 類聚国史、日本霊異記、元亨釈書、日本往生極楽記、都率上

例えば『明恵上人伝記』は、「援引書目」に見えないが、六幻利用された文献は、さらに多かったことがわかる。「此外諸寺諸山ノ縁起旧記等ハ別ニ挙ズ」と断っており、実際にり、利用された作品の実数ではない。蓮体も、右の列挙に続き、三十三は、「観音の三十三身」の如く、観音にちなむ数字であ

が記されており、利用が確認できる。この他、前節の五9での例『雍州府志』(三5・京都感応寺ノ観音ノ事)なども、本文に書名【'壒嚢鈔』(二4・泉州槙尾山千手観音並ニ吉祥天女霊異ノ事)、人は〕和書ニハ明慧伝ヲバ必ズ見ルベシ」という評価も見える。「栂尾ノ明慧上人ノ事」に使われている。その中では、「〔出家の「栂尾ノ明慧上人ノ事」に使われている。その中では、「〔出家の「栂尾ノ明慧上人ノ事」に使われている。その中では、「〔出家の「栂尾ノ明慧上人/伝記』は、「援弓書目」に見えないが、六4

名はないが利用されているとおぼしい作品もある。(『徒然草』『林葉累塵集』)と同様、本文にも「援引書目」にも書

「源尊法師冥土ニシテ観音ノ引摂ニ預ル事」など)。 当数にのぼる(例えば、三5「京都感応寺ノ観音ノ事」、六26つのは『元亨釈書』である。同文的一致が認められる説話も、相って、『冥応集』が用いた古代・中世の作品中、ひときわ目立

蓮体は、二16「祈親和尚観音ノ告ニ依テ高野山ヲ再興シ玉フが専治師写出ニミラ観音シ弓担ニ予ノ書」たと、

事」に、

入ラレタリ。リ。サレバ釈書ニモ祈親ノ伝ヲバ感進ニモ入ズ、檀興ノ科ニリ。サレバ釈書ニモ祈親ノ伝ヲバ感進ニモ入ズ、檀興ノ科ニ金剛峯寺ノ再興ハ、実ニ祈親(=持経上人)ノ力ナリトイへ

たようである。また、五9「播州清水寺千手観音ノ事」の、とあるように、『元亨釈書』の編集姿勢に強い信頼感を持ってい

カ、清水寺ト号セルヤラン不審ナリ。釈書ノ二十八二犬寺トアリテ、清水寺トハ言ズ。何ノ時ヨリ

蓮体が常に意識する、一つの基準であったといえるだろう。寺」)、『元亨釈書』に触れることを忘れていない。『元亨釈書』は、と一致していない場合、現状を認めながらも(説話題目に「清水のように、現状(寺名「清水寺」)が『元亨釈書』(寺名「犬寺」)

こともうかがえる。三25「丹後成相寺千手観音、並ニ殺生肉食ヲただし、無批判に『元亨釈書』を受け入れていたわけではない

戒ルノ事」では、説話の舞台に関して、

〔成相寺は〕康頼ノ宝物集ニ丹後トイへリ。釈書ニハ周防ノ

三井寺トイへり。 蓋シ似タル事二処ニアリケルヤラン覚束ナ

他書と比較し、不審な点への私見を述べている。 先ほども触

三巻ニ詳ナリ」と、やはり他書との比較を行っている。『元亨釈 れた六47の明恵説話においても、「釈書ノ伝ハ最略ナリ。 別伝記

相についてはさらに分析を積み重ねていく必要がある。 次に、近世成立の依拠資料として、二つの例を挙げる。一つは

書』は、『冥応集』の出典として看過できないだけに、利用の様

『観音新験録』(月潭道澄 元禄九年 [86] 刊。以下『新験録』)、

徳記』)である。 一つは、『四国徧礼功徳記』(真念 元禄三年[卿]刊。以下『功 『新験録』は、「援引書目」の中に見える。蓮体が確実に参照し

類話関係にあることが判明した。これは、『新験録』で「附属」 たところ、『新験録』の全四十七話中、三十八話が『冥応集』と があることについては、すでに指摘がある。今回、改めて確認していた作品である。『冥応集』に、この『新験録』からの採録話

しかし、五8「石間寺ノ叡効捨身並ニ弘法大師雲識カ捨身ヲ救玉 フ事及ビ清水ノ舞台ヨリ捨身セル人ノ事」における、「僧雲識が、 一方、『功徳記』の名は、「援引書目」にも本文にも見えない。 ど、考察を進めるべき点は多いが、『冥応集』にとって『新験録』 となっている最後の九話分を除くすべてである。両作品の比較な

ることが期待される。

が重要な種本であったことは疑いない。

延宝九年(18)に、讃岐の出釈迦岳から捨身をすると、黄衣の僧

『功徳記』には収録されている。『冥応集』では、 (弘法大師とされる)が現れ雲識を救った」と同内容の説話が、 説話の冒頭は、

然レドモ深ク弘法大師ヲ信ジ奉リケレバ、 識ト云僧年十八歳ナリシガ、心少シソヾロニテ定レル事ナシ。 又延宝ノ初ニ、備後ノ国安名ノ郡曾禰原村宝泉寺ノ弟子、雲

となっている。『功徳記』の当該部分は、

なりしが心すこしすゞろにてさだまれる事なし。 備後国安名郡曽袮原村宝泉寺の弟子雲識といふ僧、年十八に 大師を深く信じける。 しかれども

の出典と認定してよいだろう。 これ以降もほぼ同じ内容・表現である。『功徳記』は、『冥応集』 である。小異はあるが、書承関係を想定できるほど酷似している。

なことも特筆すべきである。地元河内はもとより、中国、(ミュ) 江戸等での見聞譚は、近世仏教説話研究にとって大きな鉱脈とな ているが、この点とともに、蓮体自身による各地の見聞譚が豊富 このように『冥応集』には、古今の多彩な文献資料が用いられ 四国

ならない。 浄厳(寛永十六~元禄十五年・⒀~⑽)の存在を考えておかねば 父にして師であり、「近世における真言教法の再興者」とされる(ミヒ) 収集の一つの契機になったといえる。しかし根元には、蓮体の叔 蓮体は、庶民教化のため各地を訪れている。そのことが見聞譚

蓮体編『浄厳大和尚行状記』(元禄十五年成立。上下二巻。以 7

下『行状記』)巻上・延宝五年(町)九月二十九日条には、浄厳下『行状記』)巻上・延宝五年(町)九月二十九日条には、浄厳の化導や霊験を記録するよう、蓮体が父玄沢から言われたと記さの化導や霊験を記録するよう、蓮体が父玄沢から言われたと記さの化導や霊験を記録するよう、蓮体が父玄沢から言われたと記さの化導や霊験を記録するよう、蓮体が気玄沢から言われたと記さいに導いる。果たして、蓮体が集めた浄厳の霊験のいくつかは、浄厳のに集まってきたといってもよいだろう。

象徴的な例ともいえる。

おわりに

して捉えていくことを目指したい。話について分析を深め、その上で『冥応集』という作品を総体と提示してみた。今後は、本稿で提示した課題を踏まえ、個々の説以上、『冥応集』について、その性格と研究における課題とを

Ė

(1) 『国書総目録』第二巻(補訂版 平成元 岩波書店)に『観音(1) 『国書総目録』第二巻「平成2 岩波書店」による)、延久に集』・『観自在菩薩冥応集』として挙がる。前者「一みょうおうしゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、うしゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、方しゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、方しゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、方しゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、方しゅう」、後者「一めいおうしゅう」。原本の振り仮名に従えば、方しゅう」、後者「一の通り、単位を表しましま。

目録』が基にした『享保書籍目録』(享保十四年『四』刊)では、 蓮体の著作として「観音新験録冥応集」が挙がる。『国書総は、蓮体の著作として「観音新験録冥応集」巻三後半、巻四後半係で現在同寺に所蔵されるのは、『冥応集』巻三後半、巻四後半所・地蔵寺蔵として挙がる(同寺は蓮体入寂の地)。『冥応集』関刊・地蔵寺蔵として挙がる(同寺は蓮体入寂の地)。『冥応集』関刊・地蔵寺蔵として挙がる(同寺は蓮体入寂の地)。『冥応集』関刊・地蔵寺蔵として挙がる(同寺は蓮体入寂の地)。『冥応集』関刊・地蔵寺蔵として挙がる(同寺は蓮体入寂の地)。『冥応集』関刊・地蔵寺蔵といる『国書総目録』には、『観自在菩薩冥応集続』が宝永年間なる『国書総目録』には、『観自在菩薩冥応集続』が宝永年間なる『四書総目録』には、『観音在菩薩冥応集続』が宝永年間

「観音新験録冥応集」は存在しないと考えるべきである。ある。「同冥応集」の「同」も、「観音」と見るのが自然だろう。四番目は松誉『観音霊験記真鈔』(宝永二年[ハパ]刊)のことで並ぶ。三番目は厚誉『西国三十三所観音霊場記』(享保十一年刊)、「観音新験録」「同冥応集」「同西国霊場記」「同霊験真鈔」の順で

- 「本」「末」に分けられている。「本」は一分冊目、「末」は二分冊(2) 各巻二分冊。巻四~六は、各巻冒頭の目録によれば、それぞれ

大学大学院文学研究科紀要」7 平成19・3)、松本昭彦氏「『観

音冥応集』の中国故事・説話」(「三重大学教育学部研究紀要」 58

(人文科学) 平成19・3)、中川真弓氏「『観音冥応集』と宝泉寺

マルリー連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4 製品―連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4 製品―連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4 製品―連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4 製品―連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4 製品―連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4 製品―連体の備中における書写活動をめぐって―」(「詞林」4

- 底本は同志社女子大学蔵本で、書誌的情報は『宝永版本 観音冥底本は同志社女子大学蔵本で、書誌的情報は『宝永版本 観音冥用に際し振り仮名は省いたが、一部残した箇所がある)。同書の) 神戸説話研究会編・和泉書院刊。本文の引用は同書による(引
- 『冥応集』所収説話については山崎が執筆。(6) 中原香苗氏との共著。蓮体の生涯・著作については中原氏、
- (7) 巻一刊記に挙がる書肆は小嶋勘右衛門・毛利田庄太郎、巻六刊(7) 巻一刊記に挙がる書肆は小嶋勘右衛門・毛利田庄太郎、巻六刊
- 6)参照。 世真言宗の庶民教化―来世信仰―」(「密教文化」9.昭和4.。) さらに光明真言・宝篋印陀羅尼信仰が加わる。上田霊城氏「近
- 輪一身体也」(大正蔵七六粉中)がある。 と『延命地蔵菩薩直談鈔』(元禄十年 [盼](9) 同時代の例には、必夢『延命地蔵菩薩直談鈔』は同文。影響関係あるか)。 古い例でと『延命地蔵菩薩直談鈔』は同文。影響関係あるか)。 古い例でいる。 同時代の例には、必夢『延命地蔵菩薩直談鈔』(元禄十年 [盼]
- 巻分取りやめについて言及する。(16・4)では、後述する巻六末尾の文言を踏まえ、長谷寺用の二))。西田耕三氏「近世説話集10の解説」(『国文学』49-5 平成
- 秘釈附タットド埋蔵、ド丁、地蔵菩薩四重秘釈ノ事」)は、最終巻(巻六事」という説話がくる。地蔵についての概説(「地蔵菩薩梵号ノ(11)『礦石集』の「叙」の後には、「地蔵菩薩女人ノ横死ヲ救ヒ玉フ(11) ただし、現行の『冥応集』には、長谷寺説話も収録されている。

末)末尾にある。『礦石集』の配列についても考える必要がある

の説話配列(後述)と通じるものである。 関係に比較すると、概論から具体例に入っていく『冥応集』の構成の方が整理されている印象を受ける。なお『礦石集』につの構成の方が整理されている印象を受ける。なお『礦石集』につの構成の方が整理されている印象を受ける。なお『礦石集』につの構成の方が整理されている印象を受ける。なお『礦石集』については、塚田晃信氏「蓮体の礦石集―近世唱導説話の一光芒―」が、単純に比較すると、概論から具体例に入っていく『冥応集』の説話配列(後述)と通じるものである。

- 話研究会においても議論された。も考えられる。この点は、現在『冥応集』を輪読している神戸説も考えられる。この点は、現在『冥応集』を輪読している神戸説(3)四1における「大蛇」は、四7~10の「嫉妬」と繋がる要素と
- (4) 四12と四13に、明確な繋がりは見出せていない。ただし四11と、明確な繋がりは見出せていない。ただし四13には、「中山寺」のみならず「殺業への反省」(点線四角囲四12と四13に、明確な繋がりは見出せていない。ただし四11と
- 大きな指標となるだろう。 説話目録が収録され、説話の繋がりや流れが把握できる。今後の(5) 『宝永版本 観音冥応集』には、柴田芳成・橋本正俊両氏作成の
- (16) 注3山崎論考。
- りはない。 「江) 松誉『評論観音霊験記』(貞享四年 [887] 刊)にも、「〔洛陽 しかしながら、連体の表現上の嗜好を示す一例であることに変わ したがってこの表現は、先行作品にすでに見えるものではある。 三十三番・天王寺の〕当時の縁起は山吹のはな色衣なり」とある。
- (18)『西鶴事典』(平成8 おうふう)48~49頁参照。
- の『浮世物語』巻第一第1話・頭注六(18頁)参照。(9) 小学館日本古典文学全集『仮名草子集/浮世草子集』(昭和46)

- が、『観音新験録』との重なりを指摘されている。国書刊行会)西田耕三氏解題では四22、注11西田氏解説では六22書房)では三19、叢書江戸文庫『仏教説話集成[一]』(平成2の) 堤邦彦氏「勧化本概説」(『近世仏教説話の研究』平成8 翰林
- いる。(21) 『冥応集』に見聞譚が多いことは、注20堤氏論考で指摘されて
- 記史料集』昭和54 名著出版)。(22) 上田霊城氏「真言密教史上における浄厳の位置」(『浄厳和尚伝(22)
- 一つ。全十二話。注22上田氏『浄厳和尚伝記史料集』の「伝記解(23)『浄厳大和尚霊徳記』は、『行状記』下巻後半を構成する諸編の
- 部例会発表資料 平成18・12・9 於大阪府立大学)がある。―『観音冥応集』所収延命寺説話とその背景―」(仏教文学会本(24)『冥応集』と浄厳・蓮体については、横田隆志氏「浄厳と蓮体

本学招聘研究員・大阪工業大学非常勤講師―

鑑み、原文のまま掲出した。